

仏教行事

本学は曹洞宗宗立の大学という歴史をもつので、いろいろな仏教行事が開催されます。厳粛な行事に参加することにより、永い間培われてきた伝統仏教の一端を理解することができます。

- ^{しゅくとうひ}祝禱日=毎月1日（土・日・8・9月除く）

月の始めにあたり、世界の平和と学生諸君の身心堅固、学業成就を祈って法要を営みます。

- ^{しやくそんこうたんえ}釈尊降誕会=4月8日

釈尊の誕生を祝う日で、一般にも花まつりとして親しまれている行事です。

- ^{うらぼんえ}盂蘭盆会=7月15日

通常お盆といい、ご先祖のみならず、生きとし生けるものすべてに思いを馳せ、報恩感謝をする日で施食法要を営みます。

- ^{りょうそき}両祖忌=9月29日

日本曹洞宗大本山永平寺の開山である高祖道元禪師と大本山總持寺の開山である太祖瑩山禪師は、くしくも同じ日に入滅されました。お二人が亡くなられた日を両祖忌といい、ご遺徳を偲び、報恩感謝の法要を営みます。

- ^{だるまき}達磨忌=10月5日

禪の教えをインドから中国へ伝えられた釈尊から28代目の達磨大師が入滅された日で、報恩感謝の法要を営みます。

- ^{たいそこうたんえ}太祖降誕会=11月21日

大本山總持寺の開山太祖瑩山禪師が誕生された日を祝して記念の法要を営みます。

- ^{じょうどうえ}成道会=12月8日

釈尊が悟りを開かれた日を記念して法要を営みます。

- ^{こうそこうたんえ}高祖降誕会=1月26日

大本山永平寺の開山高祖道元禪師が誕生された日を祝して記念の法要を営みます。

- ^{ねはんえ}涅槃会=2月15日

釈尊が沙羅双樹の下で入滅された日で、本学ではこの日、釈尊が涅槃に入る時のお姿を中心にありとあらゆるものが悲しみにくれるさまを描いた大涅槃図（江戸中期作：タテ3m21cm・ヨコ2m55cm）をかかげて、釈尊の偉大な人格を思慕して法要を営みます。

- ^{しゅくとうおんがくほうよう}祝禱音楽法要・文化講演の日

心静かにお互いの幸福を祈って、4・5・6・10・11月の各15日（土・日・祝日の場合は前日）の昼休み、中央講堂で音楽を取り入れた法要と講演を行います。



駒澤大学は、はじめ僧侶の教育をはかるために設けられた学林（後に「旃檀林」と呼称）として出発した（旃の字は曹洞宗吉祥寺由来による）。旃檀とは、インドのような熱帯に産するビャクダン科の常緑喬木で、「旃檀は二葉よりかんばし」といわれる様に、細小の時から香木といわれる木である。また、宗門の書には、「旃檀林に雑樹なし、鬱密深沈として獅子のみ住す」とあって、若い将来性のある人を百獣の王獅子としてその育成発展を期待することにたとえられる。

獅子吼とは、獅子がひとたび咆吼すれば百獣がすべて従うように、仏の説法はよく一切の邪見を破することをいう。

仏教のシンボル

北インドの中央、ガンジス川沿いにヴァラーナシー（ベナレス）という古都がある。その郊外に釈尊がはじめて法を説いたサルナート（鹿野苑）がある。この博物館にアショーカ王の建立した石柱の柱頭彫刻があり、その台座に法輪がきざまれている（写真参照）。

アショーカ王とは西暦前三世紀のマウリヤ王朝の第三代で、この王の時にインドははじめて統一された。

彼は最初は武力を誇る残虐な王であったという。しかし、即位八年目に行った東インド征服の際、多数の死傷者を見て、あらためて暴力の悲惨なことを実感する。以降、彼は「力の政治」から「法の政治」にきりかえ、これを宣言し、実行した。

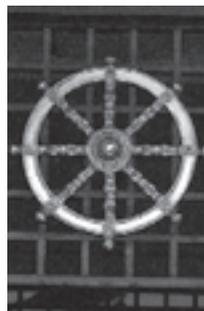
アショーカ王のいう法とは、仏教の教えに根ざす人間尊重と平和を内容とするものといっよい。当時インドには仏教のみならず、他の多くの宗教、宗派があったにもかかわらず、アショーカ王がこの法を採用したことは、彼が仏教に深く帰依したこともあるが、同時に、仏法の中に宗派の差を超えた普遍性をみていたからにほかならない。

彼は領内各地に法による施政方針を記した碑文をのこした。あるものは巨大な石柱の中頃に、あるものは道端の大きな岩の表面を平に削って、きざみこまれた。いずれの石柱も何かの動物彫刻を柱頭にもっている、サルナートのそれは四頭のライオンが背中合わせに坐っているものである。

因みに、この柱頭のデザインは、台座の法輪と共に現代のインド国の紋章として用いられている。インドの「聖王」の政治思想を現代インド政府も継承しているのである。

仏教の伝承においても、釈尊の説いた真理一法は、やはり法輪で象徴されている。悟りをひらいた釈尊の最初の説法を初転法輪というごとくである。以後、法輪は仏教のシンボルとして、全世界で共通に用いられている。駒澤大学で用いられている法輪（本部棟ステンドグラス、禅研究館正面、中央講堂入口）も、こうした歴史をふまえているのである。

=法輪=



徽章



襟章 (バッチ)

駒澤大学の徽章は、極めて大きい心で、すべての学を蔽い尽くしているというさまを表わしている。

駒澤大学が、曹洞宗大学林を前身として、今日にいたっていることはいままでのないが、日本曹洞宗の開祖道元禪師は、その著書の中で、喜心・老心・大心の三心について語っている。

このうち《喜心》とは、自らが、この世に生をうけたことを喜ぶと共に、他を喜ばせようと願いつける心であり、《老心》とは、父母が子をおもうように、生きとし生けるものへの慈しみの心である。

そして《大心》とは、大山の如く高く、大海の如く広く、いずれか一方だけに偏り、また覚るのでなく、常に、こだわりのない公平な心である。

もちろん、道元禪師は仏法を行ずるものとして、この三心を仏・法・僧の三宝に帰依する道に通じさせているが、同時に、学園における人間関係の形成には、絶対不可欠な心である。

そして、徽章の三角の頂点に、それぞれ、この三心を配したとも理解できるし、この三心を憶念する象徴ともなるのである。